

博物館 アラカルト 15

げっかおぐら こしゅうゆうず ●月下巨椋湖舟遊図

旧暦の8月15日は「中秋の名月」です。現在の暦では今年の9月14日になります。「お月見」として誰もが知っています。

寛政6年(1794)、茶山は妻の宣とともに、吉野・奈良・京都方面へ旅行に出かけました。奈良・伊勢・京都の名所旧跡を訪ねています。

8月15日の夜には、巨椋湖に船を浮かべ観月しています。巨椋湖は、現在では干拓されて当時の面影はありませんが、京都伏見に広がる湖でした。

この時の一行は茶山を始め六如上人(天台宗の僧・詩人)・蠣崎波響(松前藩家老・画人)・伴蒿蹊(歌人)・大原呑響(画人)・橘南谿(医家)・松本孟執(茶山門人)・米谷金城(皆川淇園門人)の8人でした。茶山・六如・橘南谿の詩から当日の様子がうかがえ、茶山は「宿鶯驚きて飛ぶ、人影の内。跳魚誤って入る、酒杯の間」と詩を詠んでいます。鳥や魚を驚かせながら船を進めたようです。

このときのようなすを描いたものが、黄葉夕陽文庫の「月下巨椋湖舟遊図」で、作者は蠣崎波響です。波響は、松前藩第12代藩主松前資広すけひろの第7子として生まれ、2歳の時、家老の蠣崎家の養子となりました。寛政6年、波響は、経世家の大原呑響を松前に招く藩命を帯びて、京へ滞在していました。茶山とも、この呑響の宅で会っています。

写真の「月下巨椋湖舟遊図」には、文政元年(1818)の年記があり、24年後に作られたものです。これは、茶山が当時をしのぶために、波響に依頼したものです。

この画には、茶山・六如・南谿の詩にあるように、鳥が驚き飛び立つようすが月の左下の部分に小さく描かれています。薄霞の巨椋湖の水面を二艘の舟が行き、それに驚いた鳥が飛び立っている様子が細かに描かれ、非常に幻想的な世界が広がっています。

文政元年に茶山は吉野で花見を楽しんだ後、わざわざ巨椋湖のほとりを訪れ、この舟遊を思い出しています。「八人の同侶、五人は亡し」。すでに舟遊した8人の内、茶山と波響そして米谷金城しか残っていませんでした。(スポット展にて公開中〈～1月31日(木)〉)

(主任学芸員 岡野将士)



『月下巨椋湖舟遊図』蠣崎波響画 文政元年(1818)